Middle East within Asia

Booklet Series

No.8 (2011.3)

日本のアジア地域研究シリーズ

原洋之介「一橋大学のアジア学 赤松要のアジア経済論を軸にして」

ニーズ対応型地域研究推進事業

アジアのなかの中東 ： 経済と法を中心に

本ブックレットは、第74期一橋フォーラム「日本の思想・一橋人の文明観ーアジアと世界のへのまなざし」（2010年5月—7月、全10回、東京都千代田区一ッ橋・如水会館）での第7回講演（7月6日）原洋之介「一橋大学のアジア学ー赤松要のアジア経済論を軸にして」の録音テープを起こし、それに修正を加えたものである。講演を録音し、そのブックレットとしての刊行を許可してくれた社団法人如水会に感謝いたします。

（ニーズ対応型地域研究推進事業
「アジアのなかの中東：経済と法を中心に」事務局）

写真１　岸総理との会談（山本，川野，板垣，岸）

出典：原覺天『ある老学徒の遍歴』

写真２　昭和42年　第1回農業セミナー　赤松　要先生

出典：『拓殖大学北海道短期大学　創立４０周年記念写真集』

図１　戦前と戦後のアジア調査機関、学会、大学の間の系譜

出典：末廣責任編集『「帝国」日本の学知　第６巻　地域研究としてのアジア』2006

図２　旧東京商科大学・一橋大学グループと東亜経済研究所

名　前	学　歴	東京商科大経歴（戦前）	南方調査グループ	戦後の経歴	代表的著作
根岸　佶	東京商業学校専攻部貿易科卒（1901 年）	1908-35 年東洋経済事情講座，21 年教授，35 年退職		50 年一橋大学名誉教授	『支那ギルドの研究』斯文書院，33 年／『商事に関する慣行調査報告書――合股の研究』東亜研究所，43 年／『中国のギルド』日本評論社，53 年
村松祐次	東京商科大卒（33 年），根岸門下生	39 年助教授，東洋経済事情講座，東研（43-47 年）		50 年一橋大学経済学部教授，63 年同学部長，東京都立大学，政経	『中国経済の社会態制』東洋経済新報社，49 年／『近代江南の租棧――中国地主制度の研究』東大出版会，70 年／『義和団の研究』厳南堂，76 年
赤松　要	東京高商専攻部経済科卒（21 年），福田徳三門下生	39 年教授，商業政策，東研研究部長	○	一橋大学経済学部，明治大学，政経	『本邦紡績業経営調査』名古屋高商産業調査室，28-29 年／『世界経済の構造と原理』黎明書房，50 年／『世界経済論』国元書房，65 年
板垣與一	*1908-2004 年，東京商科大学卒（32 年），中山伊知郎門下生	40 年助教授，経済政策，殖民政策，東研兼任	○	57 年一橋大学経済学部長，亜細亜大学，八千代国際大学，政経	『政治経済学の方法』日本評論社，42 年／『アジアの民族主義と経済発展』東洋経済新報社，62 年／『アジアとの対話』新紀元社，68 年（復刻論創社，88 年）
大野精三郎	東京商科大卒	経済学史，東研兼任	○	49 年一橋大経済研究所助教授	『歴史家ヒュームとその社会哲学』岩波書店，77 年
小田橋貞寿	東京商科大卒（30 年），上田貞次郎門下生	東京商科大学，東研兼任	○	一橋大学，桜美林大学	（上田と）『国勢調査に現れたる我国民の職業』34 年／『日本の商工政策』教育出版，71 年
桐田尚作	東京商科大卒（27 年）	商業政策，東研兼任	○	一橋大学，東京経済大学	『商業学概論』千倉書房，51 年／共編『企業の需要予測』丸善，65 年
杉本栄一	東京商科大卒（26 年），福田門下生	32 年専門部教授，37 年経済原論，東研兼任	○	一橋大経済学部，経済学史学会，計量経済学会	『理論経済学の基本問題』日本評論社，39 年／『近代経済学の解明（上・中巻）』理論社，50 年／『近代経済学史』岩波全書，53 年
高橋泰蔵	東京商科大卒（29 年）	36 年助教授，42 年教授，金融論，東研兼任	○	53 年一橋大商学部，54 年同学部長，69 年退職	『貨幣的経済理論の新展開』甲文堂書店，41 年／『国民所得の基本問題』東洋経済新報社，47 年／『ケインズ〈一般理論〉ノート』春秋社，59 年
向井梅次	1907 年生まれ，高岡高商卒	東京商科大，東研兼任		一橋大学，名古屋学院大学	『マライ政治経済論』千倉書房，4[illegible] 年／『現代商業政策』国際書房，41 年
山田秀雄	東京商科大卒（41 年）	東京商科大，東研兼任	○	63 年一橋大学経済研究所教授，津田塾大学，政経	『イギリス植民経済史研究』岩波書店，71 年／編著『イギリス帝国経済の構造』新評論，86 年

山田雄三	東京商科大卒（27年），福田門下生	35年助教授，経済学史担当，43年東研兼任	○	55年一橋大経済学部長，所得倍増計画計量部会長，政経	『日本経済の計画論的考察』東洋経済新報社，54年／『国民所得論』岩波書店，59年
山中篤太郎	東京商科大卒（25年），上田門下生	36年助教授，39年教授，工業政策担当，42年東研兼任	○	53年一橋大学社会学部長，59年同学長，50年中央労働基準審議会会長	編著『中小企業の合理化・組織化』有斐閣，58年／責任編集『経済成長と中小企業』春秋社，63年
石川　滋	東京商科大卒（41年）	卒業後，華北交通，同盟通信社		56年一橋大経済研究所助教授，青山学院大，政経	『中国における資本蓄積機構』岩波書店，60年／『開発経済学の基本問題』岩波書店，90年

注）(1)「東研」は東亜経済研究所，「政経」はアジア政経学会会員．(2)南方調査グループは，1942年から赤松要（南方軍政部調査部長兼任）を調査団長として，東亜研の所員12名が英領マレーで民族主義や政治経済事情などに関する調査を実施した．

出所）(1)一橋大学学園史刊行委員会編（1986，303-548頁）．(2)本書の巻末人物データ．

図３　産業発展の雁行形態

注１：３曲線は1870年頃から第２次世界大戦までの発展過程を表す。
　２：---------- 輸入
　　———— 生産
　　— — — — 輸出
　３：縦軸は全額

出典：Akamatsu, K. (1962), A historical pattern of economic growth in developing countries, *The Developing Economies*（アジア経済研究所）, Preliminary Issue, (1). 赤松要先生門下生編（1975）。

一橋大学のアジア学　赤松要のアジア経済論を軸にして

（司会）

原先生は、兵庫県のお生まれで、当初は東京大学の理科二類に入学され、その後農学部農業経済学科に進まれました。その後、東京大学大学院に進学され、昭和51年には東京大学から農学博士を授与されておられます。大学をご卒業されてからは、東京大学の助手、その後は東洋文化研究所で、このフォーラムのコーディネーターをされている加藤博先生とご一緒されていたそうですけれども、そちらを経て東京大学の助教授、教授となられて、その途中でタイのバンコクにも数年、駐在をされたそうです。一時期タイ国のメイファールアン大学の特任教授などをなされています。平成18年、東京大学名誉教授になられまして、平成18年から政策研究大学院で現在、特別教授でいらっしゃいます。受賞歴や執筆された論文も多数おありですが、平成８年には第12回大平正芳記念賞も受賞されています。学会にはアジア政経学会、日本農業経済学会、その他に所属されていまして、出された御本もたくさんおありになりますけれども、ごく最近のものだけ紹介しますと、２０００年に中公新書から出ました『アジア型経済システム』、２００１年には岩波書店から『現代アジア経済論』、『開発経済論』、これは２００２年に第２版が出ています。ＮＴＴ出版から２００２年『新東亜論』、２００５年に同じくＮＴＴ出版から『東アジア経済戦略　文明の中の経済という視点から』という本をお出しです。ごく最近のものですと、２００６年から２００７年にかけて、

書籍工房早山から、『農をどう捉えるか』、『市場倫理主義と農業経済原論』、『北の大地　南の列島の農』、『地域分権化と農政改革』があり、ほかにも、多数、論文もお書きでらっしゃいます。本日は赤松要先生の話を中心にご講演をいただくことになっております。では原先生、よろしくお願いします。

（原先生）

起　自己紹介

ただ今、ご紹介いただきました原でございます。ご紹介していただきましたように、私は東京大学の東洋文化研究所にかつておりましたが、その話から始めたいと思います。この研究所は１９４１年11月24日に設立をされていますが、それはパールハーバーのちょうど２週間前になります。実は、パールハーバー以降は、旧国立大学に新しい組織はいっさいできておりませんので、東洋文化研究所は戦前最後にできた大学附置の研究所ということになります。現在、岩波書店から出ている「帝国日本の学知」第６巻に『地域研究としてのアジア』というのがありまして、その中に編集者の末広昭さん、現在の東京大学の社会科学研究所の教授で所長ですけれども、彼が戦前と戦後のアジア調査機関、学会、大学の系譜を整理した図（図１）があるのですが、これに沿ってお話をいたします。この図にあります東方文化学院とは外務省の研究機関で、義和団事件の賠償金の一部を対支文化事業に使うということになり、設立された中国研

究のための研究所です。東京、京都、北京と三ヶ所に作られました。北京の方は戦後、なくなってしまいましたが、京都の研究所は現在、京都大学人文科学研究所の東方部となっています。そして、東京の研究所は東洋文化研究所と昭和23年に合併して今に至っているわけです。何故このようなことを言ったかといいますと、東洋文化研究所というのは、中国研究がベースとなっており、東京大学の中の中国研究センターのような格好で発足したことを指摘しておきたかったからです。東洋文化研究所ができた昭和16年の東京大学評議会の記録を繰りますと、大東亜共栄圏をつくるための基礎的文化研究を行うという名目の下、東洋文化研究所が設立されたということになっています。

実は一橋大学には、東洋文化研究所より１年弱早く、１９４０年の４月に東亜経済研究所というのができています。この研究所は戦後、経済研究所と組織替えされて大きくなります。（図２）私の一橋大学とのかかわりは、この経済研究所の先生方との関係が中心です。まず、日本経済論の大川一司先生ですが、先生は私の先輩にあたる方です。大川先生は、東京帝国大学農科大学の農業経済のご出身で、日本で最初に計量経済学を始めたお一人です。日本経済の成長分析で多大の業績をあげ、ノーベル経済学賞の候補に挙がっていまして、内々に私も動かされていたんですが、先生が亡くなられちゃってダメになったという経過を記憶しております。またここ15、６年、ベトナムのことなどでご一緒している石川滋先生も一橋大学のご出身です。石川先生は東京商科大学を１９４１年に卒業された後、華北交通、時事通信社に入られ、経済研究所に赴任さ

れてから、中国における資本蓄積とか、日本の中国経済の、特に毛沢東時代、社会主義下の中国経済の研究のパイオニアになられました。大川先生が中心となり梅村又次先生などが協力することで、経済研究所は、明治以降の戦前期日本の国民所得の推計など長期経済統計を作り、これは現在もなお世界的な学界の共通財になっています。とにかくたいへんな業績でございますが、それをさらに拡張する方向でアジア諸国の長期経済統計を作ろうじゃないかというプロジェクトもおこなわれました。70歳を超えたのでもう隠居だとおっしゃっています尾高煌之助先生がリーダーを勤められ、尾高さんより7、8歳若い寺西重郎さん、清川雪彦さん、それから斉藤修さんたちがその主要メンバーでした。これも大層貴重な業績になるのではないかと思っています。このように経済研究所の研究手法、特徴というものを、私は肌で知っていましたが、今回赤松要先生についてお話しする準備のためにいろいろ勉強してみますと、どうも、このような実証研究という研究所の基盤は赤松先生が作ったのではないかと思い始めているところです。そしてまた経済研究所への再編にともなう経過もあり、アジア研究特に中国研究は一橋大学では経済学部の方が中心となったようです。

もうちょっと自己紹介を続けた後、肝心の話に入りますけれど、今日はサブでしか登場してきませんが、私は板垣与一先生とも何度かお話をしたことがあります。たぶん今日ご参加の皆様はあまりご存知ないと思いますが、一橋大学の非常勤講師を長く務められていたほか、農政審議会の会長も務められた川野重任という方がおられます。先生は今年中に満百歳になられますが、まだ元気

です（追記　この講演をおこなった7月末逝去された）。川野先生は、東洋文化研究所の最初の助教授に任命された一人でした。その川野先生が媒介になりまして、私は板垣先生、原覚天先生、山本登先生、そして一橋大学経済学部での中国研究の中心であった村松祐次先生に引き合わせていただきました。川野先生が東大をお辞めになるときの雑談の中で、以下のような体験についてふれているので、ちょっとご紹介をさせていただきます。昭和18年11月に先生は仏印に出かけました。これは当時、日本は仏印から米を輸入していましたが、その輸入が急速に困難となり、現地の収穫事情の調査のためであったそうです。その途上、台湾で2週間の間、飛行機待ちをしていたそうですが、日本に帰ってくる飛行機がない。フィリピン作戦の軍人たちまでが飛行機待ちをしているのを見て、戦局の結論は出たと思ったそうです。山本五十六の戦死を聞いたのはシンガポールでしたが、シンガポールに出かけたのは、帰国の飛行機が取れないまま、知り合いの京都大学出身の海軍予備学生に誘われて、ジャワからフィリピンまで回ろうと思い立ち、うっかり飛行機に乗り込んだためであったそうです。ところが、シンガポールで飛行機を降りてみると、そこは陸軍の占領地で、ジャワ行きの紹介も全然してくれなかった。結局南方総軍調査部に所属していた一橋大学の関係者、赤松要、板垣与一、山田勇の諸先生のお世話になって1週間、ラッフルズ図書館で本を読んで帰って来たそうです。

山本登先生は慶應義塾大学の国際経済の教授でしたが、ご存知の方もおられると思いますが、一橋大学経済学部の名誉教授で時系列分析の分野で高名な計

量経済学者の山本拓氏はその長男です。もう一人は、禅僧でもあった原覚天先生ですが、漢籍など読んで中国研究をされ、満鉄調査部出身でもあります。川野先生も含めたこういう先生方が、戦後にアジア問題研究会というのを作ります。（原覚天『ある老学徒の遍歴』に掲載されている写真（写真1）を見せながら）一番右に写っているのが岸信介、当時の総理です。その隣に白い服で半ズボンの方、これが板垣与一先生、真ん中に写っているのが私の恩師の川野先生、その左に山本登先生、一番左、半分しか写っていませんが、こちらが原覚天先生です。原覚天先生の『ある老学徒の遍歴』によりますと、昭和32年夏の終わりごろ、板垣先生がインドネシアとオランダへ研究旅行に発つというので、アジア問題の雑誌編集委員会のメンバーが、箱根の強羅で竹葉亭という山本先生の知り合いが経営する旅館で送別会を開いたそうです。そのときのメンバーに藤崎信幸さんという、元満鉄出身の官僚がいて、岸信介をよく知っていた。その岸信介が、ちょうど避暑で箱根にいるというので是非お会いして、アジア研究の必要性を説得して、研究所の設立をお願いしたそうです。ところが、反対に予定の二時間を超えて岸さんが一人でアジアに関する思いを語り、研究所を作る予算を付けようと言った。これが、現在のアジア経済研究所設立のきっかけとなったわけですが、このとき重要な役割を果たされたのが板垣先生で、先生はその後アジア経済研究所以外にもアジア政経学会を、川野、原覚天、山本登の各氏と共に設立しましたが、この学界は現在でもアジアの政治、経済研究の中心の学会としてずっと続いています。さて、赤松要先生についてですが、

私は一度だけ、現在の国際経済学会での報告を大教室でお聞きしたことがある程度で、直接お話をしたことはありません。ただ、赤松先生の教え子で、最近亡くなられた小島清先生には、私が大学院生のときに、アジア太平洋自由貿易構想という英語の論文集の翻訳を手伝わされたこともあります。小島先生を通して赤松先生の国際経済の本も読んでいました。

それから、元の外務大臣で、満州国建設にも関わった大来佐武郎先生です。先生は、東京大学工学部出身で、最初、逓信省に入省されましたが、その後外務省を経て、戦後は経済企画庁に勤務していました。戦後、国連がつくったＥＣＡＦＥ、後に改称してＥＳＣＡＰ（アジア太平洋経済社会委員会）という組織があるのですが、私は大来先生を学生時代から知っておりまして、「原君、ＥＳＣＡＰでも行かないか」とのお誘いを受け、ＥＳＣＡＰの本部があるバンコクに行く機会がありました。大来先生からも赤松先生のことは聞いておりましたが、バンコクには小島先生のお弟子でありまた赤松先生のお弟子さんにもなる山沢逸平先生がバンコクのタマサート大学に客員でいらっしゃいました。１年ほどバンコクでご一緒したので、山沢先生とも良く話をした記憶があります。

私は１９７５年から二年間、ＥＳＣＡＰに勤務したのですが、国際会議でアジア・太平洋の経済開発や経済発展に関する議論が行われたさい、フライング・ギースという言葉がかなり一般的に用いられるようになっていたことを記憶しております。赤松先生の雁行形態の話です。ただ、フライング・ギースと英語にして広めたのは、赤松先生ご自身ではなく、篠原三代平先生や大来先生のよ

うです。赤松先生に学生時代にお顔を拝見したことも思い出しながら、赤松先生の本も読み、先ほどご紹介いただいたテキストにも、赤松先生のフライング・ギースの話を入れたりしております。私と赤松先生の間には、そんな縁があるということです。

承　赤松教授の「学問遍歴」

池尾愛子さんの『評伝　日本の経済思想　赤松要　わが体系を乗りこえてゆけ」（日本経済評論社　２００８）、これはなかなか良い本で、赤松先生の自伝なども使われて、非常に克明にかつ正確にいろんなことをレビューされていますので、少し私流にピックアップしてご紹介してみたいと思います。赤松先生は、１８９６年に福岡県久留米市にお生まれです。久留米の商業学校、神戸高商、東京高商、すなわち一橋大学を経て、１９２１年に名古屋高等商業学校の講師として着任され、翌年４月、教授に昇進しています。赤松先生は、大学には三つの窓が必要で、ひとつめは図書館、ふたつめは自然科学の実験室、みっつめは社会科学の産業調査室だと言っておられます。名古屋に赴任したときのことを次のように書かれています。「名古屋に産業調査室、第三の窓を開く。神戸高商に調査室と呼ばれる施設があったが、これはドイツ流の資料整理室であって、その仕事は新聞記事の切り抜きを中心とするものであった。それが後には貿易統計の作成というような方向に前進してきたが、それでもいまだ統計数値を加工し、そこから何らかの法則性を導き出そうとするところまでは行って

いなかった。」それではまずいので、名古屋ではいろんな統計を集め、加工し、経済的な法則性を発見する仕事をする。そのための産業調査室を「第三の窓」と呼んでおられたわけです。そこでの作業と研究を通して、我が国における羊毛産業の発達の分析を一般化させて雁行形態論という産業発展のモデルを提出されることになります。その後、１９３９年に東京商科大学教授に着任されます。「１９３９年３月思いがけなく、私は東京商科大学に転任することになった。それは時の学長の上田貞次郎博士が東亜経済研究所を大学に附設する構想をもっていられたからであった。学長は私の名古屋での経験を活かさせようと、思われたのであろう。ここで私は二度目の第三の窓を開く任務を負うことになった。」と、この時のことを述べておられます。そしてその直後から、赤松先生は日本貿易研究会というのを主宰されたほか、『日本貿易年報』、後に改題されて『新世界経済年報』の編集に総責任者として携わっておられます。赤松先生は、この年報のほとんどの巻に論文を書かれています。どういう論文を書いておられたのかについては、池尾氏の本の中に詳しく出てきますので、そちらに譲ります。

１９４０年代当時、皆さんもご存知のように、大恐慌の後、世界各地で経済ブロックが形成されたりして保護貿易が展開される中で、日本はいかなる地域戦略をとるべきかを構想するにあたって、広域経済圏研究というのが非常に盛んになっていきました。いろんな研究所がこれにかかわりまして、ちょっと脱線しますがそのひとつの三菱経済研究所において、戦後日本のマルクス経済学

者の間でひとつの学派をなすことになる宇野弘蔵さんが主査になりまして、砂糖を事例として東アジア地域の保護貿易の問題を議論しています。ほぼ同時期に赤松先生は『世界経済年報』の中でブロック経済について議論されております。中身については後にちょっとお話しすることにして、ここでは省略します。そして、赤松先生は、『経済新秩序の形成原理』と題した学位論文を書かれましたが、１９４２年には南方総軍軍政総監部調査部長・少将の身分でシンガポールに行くことになります。赤松先生の「学問遍歴」（『世界経済評論』に１９６７年４月から一年間連載）からそのあたりのくだりを読みますと、「大東亜戦争が始まり、南方の占領地域がいよいよ拡大された。それにともなって、南方地域の調査が軍において企画され、高瀬学長は商大の東亜経済研究所をもってその一翼にあてることを引き受けたのであった。その話が私にあったとき、研究所はいまだ建設過程にあるので、少数の人員の派遣にとどめたい旨を答えた。ところが杉本栄一教授が軍の企画に全面的に協力すべきだとし、私自身、団長として出かけて欲しいと力説してやまなかった。戦前、マルクス研究に踏み込んでいた杉本君の大転換に少なからず驚いたのではあるが、確かに彼は日本興廃の危機下によって思想的に右に変わっていた。」軍の構想ではマライ、スマトラ、ビルマに満鉄調査部か三つの調査団をあて、ジャワには当時の東亜研究所―これは東亜経済研究所とは別組織です―をあて、北ブルネオには太平洋協会、フィリピンには三菱経済研究所―先ほど述べた宇野弘蔵さんが関わった研究所です―をあて、これらの調査団を赤松先生のいた商大の研究所が統括するという

ものであったようで、そのために赤松先生はシンガポールに行くことになったわけです。

ちょっと脱線しますが、大正後期以降、陸軍は行政能力をもつ軍務官僚の育成を目指して、東京大学に将校を派遣し原則3年、学ばせる制度を設けていたのですね。法学部だけでなく、経済学部にも多くの将校を派遣した。後に秋丸機関を設立する秋丸次朗は、その中の一人でした。彼は、昭和7年から10年まで経済学部へ聴講生として派遣され、その後、関東軍の参謀付で満州国の産業開発5か年計画にもとづく経済研究にも参加し、昭和14年9月に陸軍省経理局を経て、軍務局に入り、そこで陸軍秋丸機関（通称、陸軍主計局別班）というものを結成する。秋丸は東京大学に派遣されたとき、有沢広巳のゼミに入り損ねたようですが、戦争をやるためには、イギリス、アメリカの経済に関する調査をしなくてはならないと考え、その主査に当時東京大学をクビになっていた有沢広巳をすえます。ちなみに、日本班の班長には中山伊知郎が就いていました。また、南方班という班もありましたが、班長については誰であったのか良く分かっていません。名和統一だという説もありますが、この人は後に赤松先生と論争をする有名な名和統一とは別人のようです。

最近、牧野邦昭さんという若い人が、『戦時下の経済学者』という題で博士論文を中央公論新社から出版しておりますけれども、その中に細かくこの話が出ています。当時、秋丸機関は相当の学者を動員していた。当時宇都宮高等農林にいた大川一司先生や、横浜高等商業学校にいた塩野谷祐一先生のお父さん

でケインズを翻訳した塩野谷九十九や森田優三、こういう人たちが皆、秋丸機関にかかわっていたようです。戦争中でしたから致し方ないところもあると思いますけれども。当時、軍の将校でもあった赤松先生は、調査班の班長としてシンガポールに赴任することになります。そのさい、赤松先生に同行したのが、板垣与一、山田勇、山田秀雄、大野精三郎、それから短期間ではありましたが杉本栄一、山本篤太郎、高橋泰蔵の諸先生、ただ、戦争中だったということもあり、ほとんど調査もできず、シンガポールで第三の窓を開く試みはうまくいかなかったということが「学問遍歴」の中に出てきます。そのかわり、赤松先生はいろんな人物にお会いになっています。何人か名前を紹介しますと、１９43年に日本軍の後押しでビルマ最初の首相になり、大東亜共栄圏会議にも出席したバー・モーや、インドネシア独立運動の中心人物であったスカルノとハッタ。スカルノはジャワ人、ハッタはスマトラ生まれのミナンカバウ人でしたが、この二人とも何度か会っています。それから、チャンドラ・ボース。彼も大東亜共栄圏会議に参加した男で、インドの独立運動に関わった人物です。実は、赤松先生がこれらの人物と会うさいに、それを徹底的に支えていたのが、板垣与一先生でした。板垣先生自身もその後、マレーシアの独立運動家などとのいろんな関係があったようで、その話も最後の方に出てきます。とにかく、赤松先生は板垣先生の助けを借りながら、そういう活動をされました。戦争後は、ジュロン島のキャンプに収容されてしまいますが、「学問遍歴」の中にそのあたりのことについてのくだりがあって、とても興味深いので紹介しますと、レン

パン島の収容所に入れられて困っていたところに、戦前、東京商大に関係のあったプリンクレイ、おそらくイギリス人じゃないかと思いますけれども、彼がビールとサンドイッチをごちそうしてくれたときは、地獄で仏に会った思いであったそうです。また、ケインズの一般理論の原書が手に入ったのでむさぼるように読んでいたともあります。最終的には、板垣先生と共に終戦後ちょうど1年経ったころに、調査部員全員の帰還を見届けて日本に帰還することができたようです。その後、１９５３年に先生を公職追放の対象にするか否かでいろいろあったようですが、自伝にはこの件はあまり出てきませんが、池尾さんの著作に割合に詳しくその辺の事情が出てきます。結局、公職追放の対象になることなく復帰されて、１９５３年から55年までの2年間、経済学部長を務められている。戦後も、いろんな活動をされるのですが、ひとつはケインズの乗数理論を拡張する論文を書かれています。ケインズの経済学は、有効需要に焦点を縛った、ディマンドサイドの経済学ですけれども、サプライサイドの側面を入れるんです。これは大変面白い。ハロッドが作った成長モデルは、実はこの話です。全く独立にほぼ同じ時期に、赤松先生はハロッドと同じ議論をおこなっていたわけです。

さらに興味深いのは、日本の自衛と講和論争のことについても、最初から自分は単独講和の方を主張したということが書かれています。戦前期にやった広域経済圏研究の結果明らかになったように、満州、シナとの関係だけでは、日本の経済、資源、財、貿易の関係といったものは完結しない。結局のところ、

欧米との関係がないと日本経済は成り立たない、という発想をされていた。「本来において、日満支ブロックが日本に提供した重要資源は、石炭と大豆だけで、日本工業の原料としての綿花も羊毛もゴムもなく、また鉄鉱石も十分ではなかった。特に石油資源の貧弱さは、日満支ブロックの一大盲点であった」。こういう紛れもない事実を冷静に踏まえて、欧米との関係を無視することはできない、彼らとの間に経済関係を保つことが重要なのだから、そのためには単独講和をしても良いのではないかということを主張されています。大層興味深い文章なので引用しておきます。「もし仮に、極東大陸に日本工業を支えるだけの資源が十分にあり、そしてそこが共産化したとするならば、経済的に依存している日本も共産化せざるを得ないかもしれない。しかし事実はその反対で日本が必要資源を依存している太平洋圏、南方圏は自由主義圏である。日本がそこに経済的に依存するならば、またその経済的依存は政治的連帯とならざるを得ない。マルクス理論によっても、経済的地盤が上部構造としての政治的あり方を規定する。日本がアメリカと連携することは、マルクス理論からも当然とされねばならない。」広域経済圏研究や、南方での臨地調査を体験されながら、こういう確固とした思想というものが出てきたのではないかと思います。その後、赤松先生は１９６０年、一橋大学を定年退官された後、明治大学を経て、１９６８年に拓殖大学に移られます。その後、１９７４年に亡くなられました。

転　雁行形態論と経済哲学の日本的自覚

さて、赤松先生の有名なフライング・ギース論、それから「経済哲学の日本的自覚」、この２点について私なりにその紹介をしていきたいと思っています。大来佐武郎さんは、赤松先生が亡くなられたときの遺稿集で、以下のようなことを書かれています。「赤松先生といえば雁行形態論というほど有名だが、外国でもアカマツ・フライング・ギース・セオリーは国際経済学者の間で広く知られている学説である。私は仕事の関係もあって、国際会議にしばしば出席し、外国人と話し合う機会も多いが、開発途上国の人達は国際分業というとすぐに植民地と本国の間の垂直分業が頭に浮ぶらしく、反発する場合が多い。しかし、静的分業ではなく、動的分業（ダイナミック・ディヴィジョン・オブ・レイバー）として、赤松理論の考え方を話すと相手に納得してもらえる場合が多い。日本自体が次第に工業製品輸入国に転化しつつある現在、赤松理論は強い現実的な説得力を持つように思われる。同時にその考え方は、工業化を目指す発展途上国にとって、自分たちもやがて工業製品輸出国となり、先進工業国と水平分業を発展させる可能性があるのだという将来に対する展望を与えることによって、彼らを勇気づける面をもっているように思われる。」

大来先生のこの追悼文は、短い言葉で上手に赤松先生の理論、雁行形態論の要点をおさえておりますので、ご紹介をした次第です。このフライング・ギースという言葉は、先に述べた１９３５年に赤松先生が出された「我国羊毛工業品の貿易趨勢」という論文で、初めて出てきます。日本の羊毛産業は、完成品

の輸入から始まり、輸入しているということは国内に需要があるということですから、その後国内で生産が行われるようになり、生産能力、生産性が上がって、輸出競争力を持つようになり、今度は逆に輸出するようになる。輸入、国内生産、輸出という変遷を経た小さな山型カーブの連鎖に、空飛ぶ雁の姿を見る。まさに、スタティックな比較優位の理論ではなく、ある国の比較優位性のダイナミックな変化を的確に捉えた議論なのです（図３）。

現在の経済学の発想からすれば、ある種の貿易構造が補完的な貿易構造になると、それによって両方が得をし、予定調和的な形で国の経済発展が進んでいくというイメージがある。しかし赤松先生の議論はそうではなく、そこから摩擦が生じるとする。そして摩擦があってもめるために、次のステップへ進むとのであり、現代風に言う不均衡、均衡にはならない。均衡点まで行かずに常に不均衡が再生産され、この力によって新しいシステム、メカニズムが生まれるということを、かなりはっきり強調している。そこには産業技術の高度化と同時に、交通技術の高度化も含まれ、交通技術の高度化は地理的に近い範囲の経済圏を生み出す原動力となる。そしてもう一つ、世界経済が同質化の局面に入ると、各国は必ず保護主義になる。また世界経済が異質化の局面に入ると、自由貿易という経済政策が主流になってくるという。各国の経済政策が保護主義になったり、自由主義になるオルターナティブ、交互に変わっていくプロセスを、このような議論でまとめられています。

『金廃貨と国際経済』、これは赤松先生がお亡くなりなった１９７４年に出

版された論文集ですが、先生の最後の本だと思います。この本に収録された論文で、赤松先生は自らの雁行形態論について、「雁行形態と名付けたのは、秋の月夜に雁が列をなして、飛んでいるとき、山型の列をなし、その列がふたつ、みっつ交差して飛んでいくイメージが私にはあったのである」と書かれています。アジア経済研究所の英語雑誌の創刊号に、赤松先生が論文を書かれたことで、赤松理論が Wild Geese Flying Pattern Theory とか、Flying Geese Pattern Theory と呼ばれて世界に知られるようになります。現在でも、Flying Geese というモデルは、開発経済や国際経済を研究する者の中では普通名詞となっているといっていいほど、に定着しています。

また現在とは大きく時代が違う当時だったこともあり、赤松先生は、マルクスやヘーゲルの理論などとの緊張関係の中で社会科学者としての、あるいは経済学者としての自分の方法論というものを意識しながら経済哲学についても独自の構想を纏められています。それが赤松先生の表現では「総合弁証法」ということです。１９７３年に「国家経済思想変遷の歴史法則性」と題して拓大の論集にお書きになった論文があります。少し引用しながら紹介します。

経済には区別すべき３つの変動がる。第一に成長変動であるが、それは人口増加とか生活困窮とか技術革新とかいうような変動が生じ、それらは従来の生活実体の在り方と矛盾的、相克的現象をおこす。成長変動となづけた経済成長ないし後退とはこのような矛盾現象である。ついで第二は循環変動である。これは、生産あるいは物価の上昇のうちに自らこれを阻止する矛盾が現われ、そ

の上昇が下降的となるとともにまた下降を阻止し上昇への転換を引きおこすという循環的矛盾である。最後が構造変動である。これは、経済の諸部分の間におこる矛盾によって生じる。一つの生活実体、例えば国民経済の諸部分を構成する諸産業の成長率が異なるとき、その国民経済は構造変動を引きおこしているのである。構造変動は循環変動とは異なり、中期、短期の期間中にも再びもとの構造に復帰するのではなく、永きに亘って持続するものであり、経済実体の言わば質的変化をもたらすものである。この経済実体の質的変化こそ経済観念の質的変化を始発させるものに外ならない。

総合弁証法を構成する原理からみると、成長変動は「事物の現象が正反の対立を生ずる」、それを矛盾性原理という、「循環変動は正反が合一に止揚される過程」、これを合一性原理という、構造変動は「この正反がより高度な全体性の部分として含み上げられる」全体性原理である。これは赤松先生の議論です。

分かったような、よく分からないような議論ですが、実は板垣先生が、赤松先生の追悼会の中で、私にはよくわからなかったと、正直に書かれています。赤松の総合弁証法に関係して、拓大で行われた追悼会での中山伊知郎先生の講演を紹介しておこうと思います。「私どもは、おそらく50年に近い期間、同じような道を進んできましたのでありますが、今日ふり返ってみますと、われわれ、赤松君も私も、同時代の人は皆、日本の心を持ちながら西洋の学問をした。」また、こういう文章も出てきます。「私は神戸高商で赤松君と一緒に学んだ。」「私はわが赤松君に、同じ経済学をやっていても、日本人には日本人らしいや

り方があるということの典型を見、そこに限りない魅力を感ずるのであります。」中山伊知郎先生は、その経済学のなかで、安定と進歩ということを強調されています。私は直接には習ったわけではありませんが、中山伊知郎先生ともものすごく仲が良かった東京大学の農業経済の先生であった東畑精一先生の系譜に属する者ですから、いろいろ中山先生の本も読んだことがあります。

それはさておき中山先生は続けて、自分の考えを赤松さんに批判されて、やっつけられたといわれています。「私の考えでは安定と進歩の条件を探求することが経済学の本来の目的である。そして、この二つの条件は必ずしも常に共存せず、むしろ矛盾するという点を強調して、その条件の解消の先まで安定の条件を拡充しました。」「赤松教授の言葉によると、「うねり」の問題だという。ちょうど大洋の水がうねりを起こすような運動だと。矛盾がある、それを克服して、同一性をもって一つの休止がくる。その休止からまた矛盾が出てのびていく。この過程はうねりだ。つまり、景気循環の表面的なうねりである。しかし、実はそのうねりにともなって、もっと基本的な矛盾が経済体系全体の中に生まれてくる。それは、部分と全体、あるいは部分と他の部分との間に、調和のできないひずみができる。ある部分は非常に大きくなる。ある部分はむしろ従来通りの力で止まっている。そうすると、強くなった部分とその他の部分との間に、摩擦が起きる。この摩擦は必ずいつかは解消されなければならない。これを解消する原理が全体性である。経済学はこの全体性をつかむことこそを目指すべきなのだ。赤松君のいうところの、あのヘーゲルの三つの原則は、無限の

連鎖なんじゃないだろうか。無限の連鎖だとすると、その先にあるものは何かわからないという意味で、一つの安心を人間に与えているのではなかろうか。それが学問とどう関係するのか。とにかく西欧の学問をしながらも日本的なものを失わなかった赤松君の学説に、私は強くひかれるのであります」と、こういう追悼文を書かれています。基本的には経済の動きを単に表面的に見るだけではだめで、経済のそのときそのときの浮き沈みというほぼ1年を単位とする短期の現象、数十年のわたる循環的変動、そしてもっと時間のかかえる構造変化、こういうものの組み合わせで経済の発展を見ていくべきである。近代経済学のテキストに書いてあるような、非常に単純な均衡論では経済を見ることはできない、もうちょっと深く見なくてはいけないという発想を赤松さんが持っていたことは間違いないと思います。中山伊知郎さんもその点は認めていて、このような追悼文になっているのではないかと思います。

赤松先生の場合、日本の経済学は、日本人が自国の実態をよく観察し分析することで確立させなければならないということを強く訴えています。先生の文章を引用しますと、「今や輸入した外来物を消化し、またそれとの矛盾を止揚して、日本経済学は日本的自己に還帰せんとする転換期にたっているのである。日本の経済学の認識方法が自己生産されて初めて、輸入された経済学といえども、日本の国民経済学として確立されるようになる」。こういう意識を非常に強く持たれていた。赤松先生の「学問遍歴」から考えると、このような議論をはっきりと確信しはじめたのは名古屋におられた頃だったといわれています。そ

の意味で、名古屋での時代というのは、赤松先生の学問に大きなインパクトを与えた時代であったと思われます。少なくとも戦後、東亜経済研究所が経済研究所となった後、大川先生のほかにもアメリカから都留重人さんなどが入ってきて、色々な実証研究をやっていく基盤ができたのだろうと思います。

ひとつ言い忘れましたが、大学になる以前の高等商業学校が戦前に日本各地につくられます。例えば神戸や山口とかですが、どこでもアジア経済に関する、大きな研究所とまではいきませんが、研究室規模のものがつくられています。これも、先ほど言った末広さんの本の中に、松重充浩さんという人が書いた「戦前、戦中期、高等商業学校のアジア調査：中国調査を中心に」という論文がありますが、その中に国公立、私立を問わず数多く設立された高等商業学校は、何らかのかたちでアジアに関する調査研究に関与しているとあります。例えば、東亜経済研究所といったような名前のあった研究室は、多くの高商に設立されていたほか、アジア資料のかなり膨大な収集については、旧帝国大学よりも旧制商科大学および旧制高商で行われていたとも指摘されています。例えば、一橋大学との関係もかなり深いと思いますが、神戸大学に経済経営研究所というのがあります。ここも神戸高商の資料室の延長線上にありまして、しばしば訪ねていましたけれども、当時の日本の商社、貿易会社の統計資料を持っています。また、この論文は、山口高商のケースを非常に克明に追いかけて書いておりますけれども、私は、高等商業学校でのこのような研究の手法、やり方というものが、一橋大学の経済研究所にかなり影響しているのだろうと思います。

アジアとの関連でいいますと、石川滋先生などは非常に苦労されて、人民中国のいろんなデータを集め、お弟子さんもいっぱいつくられて、そのとき許される限りの実証データを踏まえて理論化するという研究姿勢を一貫してもたれています。雁行形態論のようなものを生み出していった研究手法というのが、かなり強く残っているのではないかと考えています。

結　21世紀世界への含意

今年２０１０年というのは我が国にとって大変重要な年となっています。中国とアセアンのアーリー・ハーヴェスト期間も終り東アジア全体でいわゆるＦＴＡ、自由貿易協定がいよいよ実効段階にはいっています。ＦＴＡは日本もシンガポールやメキシコとの間で締結していますが、つい先日ですか、中台間でも協定が結ばれています。日本の総理が鳩山さんから菅さんに代わって東アジア共同体構想がどうなるのかという問題もあります。そして今年の秋、いよいよ横浜でＡＰＥＣの首脳会議が開かれる。民主党も日米ＦＴＡということも言っております。日本は明治以来、世界経済の中で生きていくしか途はないわけですが、東アジア地域がひとつの市場圏に統合される自由貿易経済圏のようなものがいよいよ本当に成立することになりそうです。その中で日系企業が外国に投資するように、外国の企業も日本に投資する、こういう投資と経済発展の相互依存が生み出す地域経済のダイナミズムをどう捉えるかという大きな問題があります。この課題についていうと、赤松モデルの大きな流れの中に新しい

要素を入れることで、より現実に近づける努力が赤松先生の学派でなされるようになっています。こういう新しい議論については、昨年出版された池間誠編著『国際経済の新構図　雁行型経済発展の視点から』を是非一読されることをお勧めします。さらにＦＴＡの場合には、大問題は人の移動に関することですけれども、看護師の問題とか、タイからのマッサージの女の子どうするかとか、いろいろ、各国との間で個別の問題が残っていますが、もっというと労働力の国際間移動の自由化がこれから大きな問題となってきそうです。

こういう大きな状況の中で、我が国はこれからどう生きていくのか。これから世界経済がどのように動くのか、その経路はダイナミズムを地域的な東アジアのブロックになるのか、ＷＴＯを経由したものとなるのか、いくつかのシナリオが考えられるわけですが、当然、世界経済は全体の均衡をとりながら市場の力だけで予定調和的に発展するわけではありませんので、どうしてもいろんな問題が起きてくる。そのような現代の問題を考えるさいに、赤松先生の経済変動を三つのレベルでとらえる議論は、大きな現代的意義をもっているのではないでしょうか。赤松先生の高弟であった小島先生は、赤松先生のように貿易だけに限定するのではなく、直接投資と貿易構造の変化との関連が正面きって議論されています。直接投資と資本移動まで含めて拡大された「赤松学」とでもいうべき国際経済論、まさに大来さんが言ったダイナミックな国際分業論が今日、再度決定的に重要になってきているのではないかと思います。

フランスの有名な歴史学者フェルナン・ブローデルも、世界経済の変動・動

きを、短期の出来事、中期の循環、長期の構造という三つの時間軸での変動として捉えています。それは、赤松先生の総合弁証法の発想と大層似ているのではないかと思っています。この意味で、アジアだけではない世界経済の動きやダイナミズムを読み解くときに、赤松先生が提唱されたフライング・ギースのような、日本発の経済学、経済論は、大いなる研究業績であるといえるのではないでしょうか。

今日、ほとんどお話しできませんでしたが、南方滞在のさい、ほとんど秘書のように赤松先生を支えていた板垣与一先生は赤松先生とは違って、いわゆるピュア―な経済学からは外れたところで研究をなさっておられました。具体的には政治経済学、たとえばインドネシア研究、民族調査、現地研究、ナショナリズム等々、戦後もずっと、こういった方向の議論をし、『アジアとの対話』という今読み直しても決して時代遅れではないエッセイ集も出されていますし、やはりナショナリズムの問題が中心になっていると思います。

現在タイやインドネシアにおいて、グローバリズムが急激に浸透する中でのナショナリズムの台頭が、重要な問題として再浮上してきていると思います。この点からも、板垣先生のナショナリズム研究を再度、見直してみる価値があるのではないかと思っています。梅棹忠夫さんが、文明と文化を区別して定義しています。梅棹さんによれば、文明というものは、どこにでも移転可能な、一種の社会の仕組みのようなもので、それとは反対に文化というものは、それを共有する人々の歴史や伝統という系譜の問題であるそうです。この梅棹さん

の定義をくくり直して、もっと別の素直な表現で文明や文化について語っているのが司馬遼太郎さんです。司馬さんによれば、文明とは便利な器具のようなものだ、文化というのは、味噌味みたいなもので、食ったやつにしか、ようわからんものだと。梅棹・司馬両氏の定義は非常に似ているものと言えますが、なぜ、ここで私がこれらについて言及したかと言いますと、赤松先生の経済学は、経済の仕組み、産業の文明論ですね、梅棹流にいえば。一方、板垣先生は、仕組みの問題や、ナショナリズムの興ってくるプロセス、また民族運動がどうして出てくるのかといった実証的な分析をおこなわれています。つまり梅棹流の文化、つまり人々の価値観、国家建設に対する歴史とか伝統とか、系譜のような問題を議論されている。日本とアジアの関係を見ていくときに、梅棹流にいえば、文明と文化という両面をどううまく結び合わせながらやっていくという視点が必要だろうと思います。私の印象では、赤松先生のダイナミックな大きな経済文明の構造のような議論と、板垣先生がやられたような、歴史というか、一種の伝統、系譜のようなもの、この両方の視点を混ぜ合わせないと、これからのアジア学は成り立たないのではないかと思っております。

（写真２の説明をしながら）拓殖大学は、北海道の深川に短期大学があります。昭和42年、西暦では１９６７年に創立40周年を記念して行われた講義のさいの写真です。拓大の写真集からコピーさせていただきました。学生に向けに行った第一回夏期農業セミナー、拓大は深川では農業を中心にやっております。やはり、この写真でも黒板に波が書かれています。これはまさにコンドラチェフ

の波ですけれども。拓大学長の渡辺利夫さんと酒を飲んださいに「原君、こんな写真もあるよ」と見せてもらい、コピーして持ち帰って来たものです。赤松先生は、拓大でもこのように北海道にまで赴いて、若い学生さんを前にしてコンドラチェフの波について議論をされていた。ずっと一徹に、こういう議論をされていたことが良く分かる写真だと思い、ここで紹介させていただきました。まとまらない話になってしまったですが、これで終わります。

赤松先生の景気循環と構造変動に関する質問

赤松先生のいう成長変動と循環変動、この両者は現在の経済学に照らしても割合理解しやすい議論です。成長変動は短期の景気循環論に対応しますし、循環変動は有名なコンドラチェフの長期波動に対応するものです。問題は構造変動です。赤松先生の文章を紹介すます。「経済の諸部門の間に起こる諸矛盾の発生によって生ずる。たとえば、国民経済の諸部分を構成する諸産業の成長率が異なるとき、経済は構造変動を引き起こしているのである。構造変動は循環変動とは異なり、中期、短期の期間中にも、再び元の構造に復帰するのではなく、長きにわたって持続するものであり、経済実態のいわば質的変化をもたらすものである。この経済実態の質的変化こそ、経済概念の質的変化を始発せるものである。」先生は、この構造変動が国の経済政策のあり方を決めると考えられています。例えば、イギリスの重商主義から自由主義になった場合、産業の中で成長した部分の利益追求に押されて、自由主義という経済政策が出てくる、そ

ういう議論をされているわけです。構造変動というのは、ひとつの国民経済の中でのダイナミックな産業間の不均衡発展の議論だといえるのではないでしょうか。同じ製造業の中でも伸びるものがある。輸出競争力が付いてきて、雁行形態でいえば、輸入から国内生産が始まって、国内生産によって、ラーニング・バイ・ドゥーイングみたいになって、経験を積むことによって生産性が上がる。今のはやりの概念でいえば、総要素生産性ＴＦＰが上がるようになってくると輸出になる。そういう一方で、それに追いつけずに、衰退して全部、輸入に移行するようなケースが出てくるということも赤松さんは随分書かれています。製造業、農業といった大きな区分ではなく、もう少し産業分類を細かくとって、世界市場での需要側の条件と技術進歩なし革新という供給側の条件が相互連関して、ぐっと伸びる産業と伸びない産業の間の、伸びていく産業と没落する産業のダイナミズムみたいなものがたぶん、頭にあって、こういう議論されているのだろうと思います。別の言い方をすれば、国内の産業構造の大きなダイナミックな変化があるために、たとえば完全な農業社会から工業社会に変わると、いろんなものが変わるはずだ。そういうイメージで、この構造変動ということを使われているのではないでしょうか。

もう一個、分かりにくいと僕が言っていたのは、これが世界経済にもあてはまるとされているところです。成長しているアメリカと没落しているヨーロッパ、そういうアナロジーでも語られているので、世界経済全体の中での構造変動まで、構造変動という概念が拡張されて使われていますので、構造変動とい

うのが分かりにくくなっているではと思っています。

日本の近代化と植民地研究に関する質問

日本の植民地研究というのは、台湾、朝鮮半島、満州、というこの三つの植民地についての研究から始まります。まず満州ですが、変な言い方ですが、満州はある種の新開地ですよね。朝鮮半島にしろ、台湾にしろ、そこには既に古くから人が住みそれなりの経済社会を築いていたわけですから。なぜこんなことを言っているかというと、日本の近代化は常にそういう問題を内包していたからです。もっとはっきり言ってしまうと、日本の中にも植民地があったわけですよ。つまり、北海道と沖縄です。北海道の開拓をよく見てください、あれは満州の先取りですよ、アイヌの人たちを追い出し、和人を入植させているじゃないですか。その意味では北海道もまた、新開地型の植民地です。例えばヨーロッパがアメリカやオーストラリアでやったことと同じです。一方、沖縄は琉球王国があって、古い伝統があった。そこに明治政府が入っていくわけで、地租改正の実施も遅らせますよね。その前に沖縄の旧慣調査をやるわけです。琉球王国の統治機構をそのまま残して、それを明治政府が利用するわけです。沖縄での旧開地での近代化という国家事業は、台湾でやったことと同じです。

札幌農学校をつくった佐藤昌介や、北海道大学の第三代学長の高岡熊雄、そして新渡戸稲造、彼らの札幌農学校での議論というのは完全に植民地論です。最初の植民地論という講義が出てくるのは、札幌農学校です。北海道への入植

に大きな役割を担っていたわけですから。満州国建設のとき、膨大な数の農民を移住させていますが、その原型はみんな北海道にある。設計主義による計画をロードマップとして、国家建設をやろうという発想があるわけです。岸信介なども完全にそうですよね。東京大学の経済学部の岡崎哲二氏は、満州国の建設のときの経済計画に関する文書に依拠しながら、非常におもしろい研究しています。研究業績を読ませてもらいますと、やはり、そこには設計による経済開発の純粋型がみられるのです。私は、どうもその発想の根本が、北海道にあるような気がしています。

もう少し追加すると、東京大学法学部民法の教授我妻栄は、戦争中に南方のジャワの土地調査をやっています。慣行調査、旧慣調査で、その成果が『蘭印の土地制度』という本です。これは、ジャワ島の中の土地制度がアダトという慣習法の上に成り立っているということを指摘した報告書です。当時の文献を使って、非常に見事な本を書いている。このジャワは、沖縄、台湾に似ている旧開地です。植民地経営においても、旧開地でどう植民地をつくるかというタイプの開発論と、人間を大量に送り込んで、未開の地に植民地を一気呵成に人工的に作り上げていく、それが日本の中に北海道と沖縄というところに見事に出てくる。それの延長線上に、まあ、沖縄の場合はほとんど台湾統治と同時進行でしたが、その後朝鮮半島が続いて、満州国において最終形態があらわれてくるわけですけれども。そういう印象があります。

雑談ではありますが満州建設のさい、経済開発の過程で、大豆栽培など農業

面で深く関わっていたのは大部分が札幌農学校の出身者です。新渡戸稲造も、後藤新平に連れて行かれて、台湾に渡りましたが、彼は日本で最初の京都帝国大学の植民地講座の教授になります。彼はその後東京大学に行って、そこでも植民地講座を担当していた。さらに後には彼はジュネーブの国際連盟に行ってしまいますが、東京大学で植民地講座を引き継いだのは矢内原忠雄です。このように、東京大学の中に植民地講座があった。その最初の担い手は新渡戸でした。日本の植民地研究に関する研究は、近年進んでいますが、それは非常に乱暴に言いますと、関係者の多くが亡くなられたからです。このような研究は、関係者が生きていたら本当にやりにくい。絶対そうです。また、終戦時に焼かれること無く、残った南方調査の調査報告書も一定量ありますので、その資料に依拠しながら日本の植民地統治の実態について冷静な分析ができるようになってきたと思っています。

（司会）

今日のお話の中で原先生が度々引用されました池尾愛子先生がお書きになりました本の中に、神戸高商時代に中山正實という絵描きと仲良しだったという話が出てきます。この中山正實画伯というのは、神戸高商から東京高商の専攻部に進まれて、洋画家として名をなした方で、一橋大学にホイットニー先生の肖像画を寄贈されていて、大変有名な方ですけれども、神戸大学の六甲台記念講堂というところには、２０００号の中山画伯の大壁画があります。また、神戸

大学の図書館にも「青春」と題された中山画伯の絵があって、これがたいへんすばらしいということが、当時から世界的にも知れ渡っておりまして、太平洋戦争末期に、山の上にあった神戸大学は爆撃対象となっておりましたが、この絵のためにマッカーサーが爆撃を中止させたという逸話が残っているほどです。この中山先生と赤松先生が神戸高商時代、仲良しだったということで、如水会では12月に、中山先生の絵を見に行く、神戸ミニツアーというのを行います。宣伝になってしまいますけれども、昨年は浜松で行いました東京工業大学と一橋大学の合同移動講座、今年は神戸で行います。そのときに、せっかく神戸まで行くからということで、大阪、神戸の発展に寄与した一橋大学の先輩である関一先生と、甲南大学をつくった平生釟三郎先生、神戸高商をおつくりになった水島銕也先生、このお三方をお訪ねするということで、大阪の関一先生の銅像、甲南学園、神戸大学に行く予定です。そのさい、中山画伯の有名な壁画もあわせて見に行きますので、ぜひ、皆様、ふるってご参加ください。先ほど、中山伊知郎先生が、神戸高商のご出身であるという話がありましたけれども、本学と非常にゆかりのある方でご紹介しました。

原洋之介（はら　ようのすけ）
１９６７年　東京大学農学部卒業
１９７２年　東京大学大学院農学研究科博士課程単位取得中退（農学博士）
１９７２―７９年　東京大学東洋文化研究所助手
１９７９―８８年　東京大学東洋文化研究所助教授
１９８８―２００２年　東京大学東洋文化研究所教授
２００２―０６年　東京大学情報学環・東洋文化研究所教授
２００６年―現在　タイ国メーファールアン大学特任教授
２００６―０９年　政策研究大学院大学教授
２００９年―現在　政策研究大学院大学特別教授
専攻　農業経済学・アジア経済論
主たる業績
『クリフォード・ギアツの経済学：アジア研究と経済理論の間で』リブロポート、１９８５年
『現代アジア経済論』岩波書店、２００１年
『「農」をどう捉えるか　市場原理主義と農業経済原論』書籍工房早山　２００６年

編業・プロジェクト事務局
〒186-8601 国立市中2-1
一橋大学・東キャンパス
マーキュリータワー５階3507室

URL: http://www.econ.hit-u.ac.jp/~areastd/

研究代表者：加 藤　博
一橋大学大学院経済学研究科教授

印　　刷：ゴトー印刷
イラスト：倉田　一明